の3巻で、黄石公の撰と称せられるが、実は後代の偽作である。

資料　郷土の伝承第3輯（宮城県教育会）

本吉郡誌（本吉郡町村長会）

気仙沼町誌

けせんぬま口碑伝説散歩（小山秋夫）

伝説（三原良吉、「宮城県史」第21巻の内）

57. 九合水とは何か

問　わらじ村長鎌田三之助翁の日記を見ますと、「九合水」という言葉が出てきます。これはどういうことですか。

答　鎌田三之助日記には、九合水〔きゅうごうすい〕という語が次のように使われています。

『明治三十七年八月二十七日(1)　鳴瀬川九合水、品井沼九合水(2)、堤防欠壊し冠水せし水田四分作となる。

明治四十年八月二十八日　洪水、鳴瀬川九合水』

この場合の漢字の九〔きゅう〕は、集める、合わせる意味で、漢字の糾〔きゅう〕と同じです。「論語」憲問第14にも『桓公九合諸侯』などの用例があります。故に九合水とは、水が諸方から注ぎ集って増水することをいっているのです。

注(1)　文久3年〔1863〕鹿島台村に生れた。明治法律学校〔明治14年創立、明治36年明治大学と改称、大正9年大学令による大学となる〕に学び、郡会議員・県会議員から代議士にまでなったが、明治42年全村あげての懇請により第5代の鹿島台村長となった。それ以来継続10期、実に38年の長期にわたり、殆ど無報酬で村勢建て直しに心血を尽した。特に祖父玄光と父三治の遺志を継いで品井沼の干拓事業を完遂したことは、まことに偉大な功績であった。常習水害にさいなまれて貧窮のどん底にあったこの寒村が、昭和26年には、他に類例の少ない単独町制を堂々と施行できる実力をもつまでに成長したのは、一にその賜物にほかならない。在任中、常に弊衣破帽にわらじばき、腰弁姿を押通したので「わらじ村長」の名で全国に知られたものである。自治体の長として、この人ほど住民の利益と幸福のために生涯を捧げ、住民の心からの敬愛を受けた人は少ないであろう。昭和2年自治・治水功労者として藍綬褒章を受けたが、昭和21年引退。25年5月3日、88才の生涯を閉じた。村民葬の列は延々1キロに及び、沿道の各戸はそれぞれ門前に花を供えてひつぎを悲

しみ送ったという。町のほぼ中央、鹿島台小学校の校門わきに「わらじ村長」姿の翁の銅像が建っている。伝記に「鎌田三之助翁伝」（故鎌田三之助翁頌徳会編）・「草鞋町長鎌田三之助」（本間楽観）などがある。

注(2) 東北本線品井沼駅の北西に、かっては東西6.5キロ、南北3キロ、志田・宮城・黒川3郡にまたがり、鳴瀬川と吉田川の合流点に形成された沼地だった。吉田川・鶴田川・広長川など多くの川が注ぎ込み、排出は小川によって鳴瀬川に導かれるのみという入水超過の構造であった。一たび大雨があれば品井沼の氾濫は、周辺の低地一帯に拡がるばかりか、あまつさえ鳴瀬川の増水が小川によって逆流するので、水害を一層激しいものにするのだった。このように品井沼一帯は、全国的にも稀な常習水害地となっていた。元禄6年〔1693〕吉田川の河水を隧道で松島高城〔たかぎ〕に流して沼への注水量を減らす穴川または潜穴〔くぐりあな〕工事を始め、数次にわたる排水工事が行われたが、根本解決は至難で、農民と水との言語に絶する苦闘の歴史が続いてきた。明治10年代の始、安積疏水〔あさかそすい〕を完成し、野蒜築港を手がけたオランダ人技師ファン・ドールンに命じて、政府がこの沼を実測させたことがあった。ドールンは調査結果を報告し、品井沼の干拓は不可能に近いと述べている。鎌田三之助の不屈の執念と献身とは、8百ヘクタールの水田の冠水流失を救い、千数百ヘクタールの干拓を実現させた。今や沼は一望の美田と化し、その名は駅名に残るだけとなった。品井沼の治水干拓の歴史と、鎌田三之助の業績については、「町史わが鹿島台」（鹿島台町）に詳しく記してある。

資料　大漢和辞典（諸橋轍次）

58. 時刻を表記する「字」と「時」について

問　東北本線が仙台まで開通した時の時刻表には、○時のことを○字と書いてあったと、最近のK紙に載(1)っていますが、それはどういうことですか。

答　時刻の数え方は、暦に関係があります。旧暦〔太陰太陽暦〕が行われていた時代には、一般には1日を12分し、それに十二支の子〔ね〕・丑〔うし〕・寅〔とら〕・卯〔う〕・辰〔たつ〕・巳〔み〕・午〔うま〕・未〔ひつじ〕・申〔さる〕・酉〔とり〕・戌〔いぬ〕・亥〔い〕を配していました。夜半が子〔ね〕の刻、真昼が午〔うま〕の刻というふうにでした。また、江